

風の色

—日本人の感覚として—

田村 専之助*

まえがき

日本では、古来知識社会において、風の色がとりあげられており、それは日本文化の特色の問題とも絡みあう重大なことなので、気象学史の専門研究者として、ひとつの仮説を提出する。西田幾太郎博士は東洋文化の根底には形なきものの形を見、声なきものの声を聞くところにある、とされたが（働くものから見るものへ）、先生のこの御意見に対して満腔の賛意を表したい。

風の色

中世の日本人は風の色について、

もの思へば、色なき風もなかりけり、身にしむ秋の心ならひに（新古今和歌集・巻第8・久我太政大臣）。

というように、風に色を感じる、としているが、秋のならひに感ずるとすれば、秋の色を感じるに違いない。しかし、ここではそれを何色ともしていない。

春風の色は、

桜色の庭のはるかぜあともなし、訪はばぞ人の雪とだに見む（新古今和歌集・巻第2・春歌・藤原定家朝臣）。

のように、桜色とされている。

これに対して秋の風の色は、何色だというのであろうか。万葉では、

真気長、恋心自、白風、妹音所聴、紐解住名（万葉集・10巻・秋・雑歌）。

まけ長く、恋ふる心よ、秋風に、妹が音聞ゆ、紐解きゆかな。

というように、秋風が白風と書かれている。

上代中国人は、季節を色にあてはめると、春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒とした。ここから秋風は白風とい

うことになる。そうとすれば、万葉人のこのような書きかたは、作者自身の実感によるものではないに違はなく、中国の古典から得た知識に基づいたもの、としなくてはなるまい。ただし、中国の古典には白風という言葉は、私の探索の限りでは見あたらない。すると、この歌の作者は中国の古典からのヒントによって、白風という漢語を新造したもの、ということになる。‘ものおもへば’の歌の作者の心の深層には、既に知的伝統となっていた中国流の秋風は白い、とする思想が存在していたに違いない。このインテリ作者は、情念化した思想によって、秋に白をあて、秋風に白を感じていたであろう。

ただし、後世の安藤昌益（1707～?）も、‘此の時、秋の白色定下に退き、定上に尽き、秋の白色転り中土に降り、万物に映じ枯尽す’。とか、‘金の白色、秋転に進んで、冬定に退き’（刊本自然真営道・巻の2・自然自色自味自能自毒の事）。などと論じているが、彼の場合には不消化のままの中国の古典思想そのまま、ここでは問題にならない。

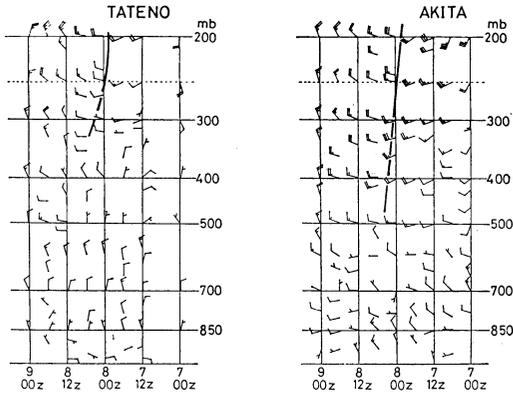
この後、秋の風を白とした例に芭蕉の、

石山の石より白し、秋の風（鳥の道・奥の細道）。と、しているのがあって、燦然と輝やいている。

いうまでもなく、風は気圧傾度にそつた空気の横の流れである。と、すれば、黄砂のような特殊な物質が混入した場合のほか、風に色を感じるとすれば問題である。色は物質でも、光でもなく、電磁波によって網膜上に結ばれる感覚である。したがって、色彩は心理的な感覚にすぎない。色彩が感覚であるとすれば、人によってそれぞれ変わって感じられてもよいはずである。ただし、秋風を白とした根源は、あくまでも中国人の思想によるもの、としなくてはならない。ともあれ、風に色彩が感じられるとすれば、気象学的には重大であり、外の民族には類例がないであろう。

これは、色なきものに色を感じる類の実例ともなる
(34頁下に続く)

* Sennosuke Tamura, 日本大学講師。



第2図 秋田と館野の高層風時間断面図。太実線はトラフ軸。

風向の順転)が見られる。このトラフは通常のトラフと異なり、上層に向ってやや東に傾いていること(前面の寒気移流、後面の暖気移流に符合)、700 mb より下層では風や温度の変化はみられず上・中層だけのものであること、がわかる。

以上のことから列状の雷雲は、上・中層に弱い寒気を持ち上層に向って東に傾くトラフの接近により、成層が不安定化したため発生したと考えられる。また、天気図上のトラフと雲画像上の帯状絹雲は、ほぼ同じ位置に解析され同一な動きを示した。このことは、天気図上の解析(数値予報も含めて)からは検出が困難な弱い上・中層のトラフでも、雲画像には絹雲の帯として把握・追跡できるという意味において、注目に値する。

(35頁より続く)

う。そうしてこれは西行(1118~1190)が、

鶯の古巢より立つほととぎす、藍よりもこき声の色かな(山家集・夏歌)。

と歌い、ほととぎすの鋭い声に濃い藍色を感じた感覚とも通ずるものであり、16世紀の人、金春禅鳳の禅鳳雑談に見える、'拍子をも多くは打つべからず、打たぬところに聞くなり'とする精神とも応ずるものである。

むすび

ごちない気象学者からは、あるいは一笑に付される

かも知れないが、風の問題である以上、気象学の範疇であることを拒むことはできない。かような風を許容するとすれば、科学としての気象学は問題とされるであろうが、それでよい。

科学は、普遍的な性格のものであるにしても、それはあくまでも人間の認識である。とすれば、人間—この場合では民族の個性—があってもよいではないか。秋風の色を白いと感じたのは、輸入された中国人の思想が醇化して日本人の情念となったもの、としなくてはならない。尺八は、中国伝来のものではあっても、既に^{じょう}翫々と日本人の情念を奏でているではないか。